

特集

第1回

教職実践研究会を終えて

夏季休業を利用して学外で学ぶ
教育実習を終えて

講演会だより

文大だより

ぶんだい堂



第64回
桂川祭

第1回 教職実践研究会を終えて

教職支援センター長
教授 廣田 健

今年8月8日と9日の両日、都留文科大学で第1回教職実践研究会が開かれました。本州のみではなく北海道・四国等からも卒業生が参加し、また都留市在職の教員も含めて両日合わせて130名の参加者となりました。

ご存じのことと思いますが、教職支援センターは、学部生・院生に対する教育フィールド研究（小・中学校等で教師の補助活動を行う Student Assistant Teacher 等の現場体験型の授業）、教育実践演習、教育実習等の実践的授業の指導とコーディネート及び教育相談活動（在學生に対する指導及び全国の卒業生と都留市在籍教員を中心とした現職教員を対象としたもの）を二本柱として活動しています。

今回の教職実践研究会は、卒後10年くらいの比較的初期のキャリア段階にある現職教員を対象に、①現場で抱える問題を交流しながら教職への定着を図ると共に、②そこで出された課題に関わって本学の教員養成カリキュラムの改善を図ること、③在學生に対しては、教育現場のリアルな実態と先輩方の努力の様子を見聞きすることで教職に対する心構えと意欲の向上を意図して実施するものです。政府施策においても教員養成の質的保障の必要性とこれに基づく教員養成課程の格付けの実施が予測される中で、在學生の教職に対するモチベーションを高め、離職率の高い初任者を中心に教職へのキャリア移行・定着のお手伝いをすることは、本学のこれからの教員養成と地域貢献にとって重要な課題であります。

会は、福田学長の挨拶から始まり、続いて本センターのあり方と本学教員養成の基本ともなっている理論と実践の往還的カリキュラムを先導してこられた田中昌弥教授による講演「今、現場にもとめられる学力論」が行われました。講演では、二十一世紀型学力の課題に触れながら、科学的概念の獲得の前提には生活的概念のベースが必要であること、その

基礎には子ども自身の活動が不可欠であること、これを踏まえ経験の意味を分析し、未来への見通し(物語)を持つこと、すなわち経験知、分析知、物語知の三領域を重視することによって、子どもたちが不変とも思える未来を自らの力で切り拓く力量を獲得することができること等が話され、聴衆の多くの共感を得ました。

この後、参加者はいくつかの小グループに分かれ、日常の教育活動で突き当たる様々な問題についてフリーディスカッションを行う分散会が行われました。分散会は、小・中・高校、特支の学校種の枠を越えて行われるものであったことから、現職からは普段とは異なる視点や立場から自由に意見交流ができて参考になるとの感想が多かったこと、レポートを用意していなくても自由に発言ができて参加感が増したなどの意見が多くありました。在學生からは、日頃の授業などでなかなか聞きづらい質問など





もできて興味深かったとの意見も寄せられました。

二日目は、小学校、中学校、高等学校の校種及び授業の工夫、生徒指導等の分科会に分かれて、参加者によって事前用意されたレポートを題材に議論がなされました。レポートの中には、「主体的・対話的で深い学び」をどのように進めるべきなのかという新学習指導要領にかかわる理論的問題から、授業中に席に着くことができない子どもたちにどのような指導が必要なのかという失敗談を含めた議論、働き方改革や学校スタンダード、初任者研修に関わる課題等について、様々な切り口、様々なテーマが取り上げられました。

参加者全体の感想としては概ね好評でありましたが、まだ一年目のパイロット事業として行ったために広がり十分ではなく、①本センターが全国各地を巡回して行う教職支援交流会とリンクするように

すすめること、②年一回の交流だけではなく、メールマガジンなどを使って定期的に交流を深めていくこと、③本学の教員養成の質保障の観点からも教員就職者の多くとどのようにつながりを確保していくのかということ、さらに④この教職実践研究会で出された様々な課題をどのように本学の教員養成プログラムの改善につなげていくのかということ等が、今後の課題として挙げられました。

本事業は、まだ第一回目でパイロット事業としてなされたものですが、大学の未来にもかかわる「教員養成の質保障」の観点からも大切なものであり、また教職へのキャリア移行・定着への支援を全国に先駆けて行っていることから入学希望者にアピールできる点においても重視されるべき課題として本センター中心事業の一つとして今後とも積極的に取り組んでいく所存です。





学校教育学科教授
内山美恵子

観察力と論理的思考を鍛える

初等教育学科の地学ゼミでは、毎年夏休みに3年生のゼミ合宿を行っています。本年は長野県北部で2泊3日の合宿を行いました。地学という学問領域は、教科書での勉強のみではなく、野外に出て実際の岩石や地層の積み重なりを観察することが重要です。現地で実物を観察し、考察を繰り返すことで、大地の生い立ちについての理解が深まっていきます。暑い中での観察になりましたが、学生たちの大騒ぎしながらも熱心に取り組む姿が印象に残りました。



目で見て触れて、肌で感じて

初等教育学科3年 横川昂奈

ジリジリと焦がすように照りつける太陽の下。先ほどから聞こえていた水音の正体が、視界が開け、パッと目に飛び込んできた時、思わず「おお」と声が出てしまいました。苗名滝が誇る自然美の神々しさたるや、筆舌に尽くしがたい光景でした。

私たち自然環境科学専攻地学ゼミは、8月16日から18日までの3日間長野県にゼミ合宿に行ってきました。この合宿を通して、学内では決して経験することのできない、五感で感じることの大切さを学ぶことができました。

1日目は長野市街地周辺、主に善光寺本堂の周囲に点在する善光寺地震の痕跡の観察をしました。1847年に地震が発生してから170年以上経った今でもなお、常夜燈の角に亀裂が走っていたり、補修された形跡が残っていたり、内山先生の解説の元、その地震の規模を目の当たりにしました。

2日目は戸隠地質化石館周辺の地層観察や、河原での化石発掘を行いました。化石館周辺は標高の比較的高い山々に囲まれており、そこで実際に見た大きな大きな地層の壁は、資料集で見た写真のものとは遥かにスケールが違いました。何千万年もの時を経て積み重なってきたものだと考えると、今

立っているこの場所は大昔海の底だった…などには信じがたい気持ちになりました。そして待ちに待った化石発掘では、ハンマーを使って岩石を叩き割り、出てきた化石（主に貝殻の化石）を塊のまま持ち帰り、そして慎重にクリーニングしていく作業を自分たちの手でしていきました。非常に貴重な体験でした。

3日目は野尻湖ナウマンゾウ博物館の見学、それから冒頭で紹介した苗名滝を見に行きました。そこでの感動は上述した通りです。

この3日間で、実際に現地に足を運び、自分の目で見て手で触れ

て体感することこそ実験観察の本来のカたちであると思いました。普段の学内での授業では“既にある”限られたサンプルが主に実験観察の対象ですが、今回は長野での地質調査の一環で採取した火山灰や岩石をゼミで解析中です。取れたてほやほやの、自分たちで採取したサンプルはやはり思いも特別です。





国文学科教授

野中 潤

ゼミの学びを学外に開く

国語教育学ゼミでは、そこでなければ体験できない学びを求めて学外活動を重視しています。そのため夏合宿のメインは、現職の先生方の授業見学をしたり現役高校生を相手に模擬授業をしたり、教育イベントに参加したりすることです。お楽しみは、文化的なスポットを訪ねつつミッションをクリアするアクティビティ。今年は大和市文化創造拠点シリウスがゴールで、21世紀型「図書館」のワクワクする空間デザインに圧倒されました。



三浦学苑と未来の先生展での学び

国文学科4年 丸山萌花

私たち国語教育学ゼミでは、9月13日～15日まで、夏合宿を行いました。神奈川県横須賀市にある三浦学苑高等学校への訪問、未来の先生展への参加など充実した3日間でした。

合宿初日に訪問した三浦学苑では、授業見学、模擬授業、四年生の卒論構想発表を行い、特進コース、進学コース、総合コース、工業技術科の授業を見学しました。現場の先生方の授業を見る機会は非常に貴重であり、教員を目指す私たちにとって学びの多い時間となりました。見学した授業についてゼミ生同士で考えを共有することで新たな発見があり、大学では学ぶことのできない教育現場の実践を肌で感じました。

さらに高校生に向けて授業を行いました。高校生や先生方からのフィードバックは厳しくも温かく、自分たちの課題発見に繋がりました。授業を行わなかったゼミ生も、仲間の授業を見て刺激を受け、自分を見直す機会となりました。

最終日には未来の先生展に参加しました。未来の先生展は、教育関係者、先生方が気になるプログラムのワークショップや講演会に参加する日本最大級の教育イベントです。来場者数は2日間で

3385人であり、教育に関して熱を持った人がこんなにも集まったのかと驚きました。今年も明治大学で開催され、実りある時間を過ごしました。

私は一般社団法人 読み書き配慮という団体が行う講義を受けました。そこで、学習障害についての講演を聞き、合理的配慮の本質を学びました。1クラスに学習面で著しい困難を示す子どもが4.5%もいるという事実を知り、教員は全ての子どもが平等に学べる場を作らなければならないなど

感じました。また、「合理的配慮」とは障がいを持つ子どもにだけ必要なのではなく、全ての子どもそれぞれに必要なだと知りました。これから教職につくにあたり、ここで学んだことを実践できる教員になりたいと思いました。

3日間の合宿は自分たちの考えが深まる有意義な時間でした。





英文学科教授
加藤めぐみ

成田空港で学ぶ

英文学科のグローバルキャリアプログラムでは、ANA 総合研究所の先生方に「グローバルキャリア研究」「ビジネス英語」などの授業を通して日頃から、ホスピタリティやビジネスについてご指導をいただいておりますが、加えて2017年夏より毎年、成田空港内のANA 研修施設で学べる体験学習の機会をご提供いただいております。他大学の学生さんたちと現場で学ぶことで、将来のキャリアへの夢が大きく広がる経験となっているようです。



ANA 総研旅客サービス業務 体験学習プログラムに参加して

英文学科3年 伊良波ステファニー瑞絆

夏季休暇を利用し、私は英文学科のグローバルキャリアプログラムが提供する「ANA 総研旅客サービス業務体験学習プログラム」に参加しました。約40名の学生が参加し3つのグループに分かれて行われた2日間のプログラムを通じて、グランドスタッフ（以下GS）という仕事について深く学ぶことができました。

1日目はビジネスマナー学習、搭乗手続きを体験しました。GSは私がイメージしていた以上に大変な職業でした。例えば、車いすを必要とするお客様、ベビーカーを使用するお客様、特別なお食事を必要としているお客様などの情

報をあらかじめ把握しておく、飛行機のバランスを確認するなど、一度に沢山の仕事をこなさなければなりません。

搭乗手続きの実習では、実際にスーツケース、パスポートをもってGSとお客様という設定でロールプレイをしました。この業務では、パスポートチェック、座席希望、荷物の中身の確認などお客様をお待たせしない素早さが大切です。そして「笑顔」で行うことが一番のポイントです。

2日目は、ゲート業務、ユニバーサルサービス（車いす実習）、アナウンスを体験しました。その中でもゲート業務はとても大変で

した。私はゲート責任者を担当し、人員配置や乗務員との打ち合わせなどを行いました。ゲートの搭乗状況を把握し適切な指示をだし、他の部署と無線でやり取りをしながら機内や機外の様子を確認します。また、搭乗時刻になってもお見えにならないお客様がいる時は、探しに行ってもらうように指示をすると共に状況によってはそのお客様の荷物を機内から取り下ろす指示も出します。この時にもゲートには他のお客様がいらっしゃるの、周りをみながら動くことがとても大切です。この業務ではチームワークがとても試され、また定刻通りに飛行機を飛ばすためには裏で大変な努力があることを実感しました。

この2日間は本当に貴重な経験になりました。他大学の学生と交流、協力しながら実習をすることができとても新鮮で有意義でした。また、実際に体験をしてみて大変さややりがいがあるものだと確信しました。今回の経験を生かしてこれからの就職活動を悔いの残らないようにしていきたいです。





むらの暮らし、 まちの暮らし

地域社会科学教授 田中里美

社会科学「フィールドワークⅣ」として、3、4年生17名と、9/2-8の日程でフィンランドを訪問しました。カンヌス市エスコラで村の小学校の維持等について、ヘルシンキで社会教育施設とその利用について学んできました。



エスコラの産業を支えた森林鉄道



フィンランドの村と 都市をたずねて

社会科学（環境・コミュニティ専攻）4年
蒲原まゆみ

「フィールドワークⅣ」では、前半は9月2日～5日にかけて国の中部に位置するエスコラ村に滞在し、後半は5日～8日にかけて都市ヘルシンキを巡りました。エスコラは、針葉樹の森や湖が広がる自然豊かな地域です。約400人の小規模な地区ですが、教育・保育・福祉サービスの提供を村独自に行っています。私たちは、行政地域にこだわらず、地域の課題は地域で解決

してきた取組みに関心をもってこの村を訪ねました。

一方で首都ヘルシンキは、トラムやバスの交通機関が発達し、文化施設を横断的に訪ねることが可能です。図書館「Oodi」は本やネットの貸出しと同時に、カフェや子どもが遊ぶ場所も1つの空間に併設されています。この図書館には年齢や学問分野の壁はありません。

地方と都市の双方に、教育機会を出来



「Oodi」3階の書籍コーナー、天井がカーブを描き、所々観賞用の植物やソファが置かれる

るだけ多くの人に提供しようとする姿がみられ、国全体で人材育成の意識の高さを感じます。



若いうちに、一日も早く海外へ！

地域社会科学教授 佐脇英志

最終日前夜の涙のお別れ会。大半が初海外の14名が、こんなにタイ国タマサート大学の学生たちと仲良くなれるとは。急激なグローバル化が進むアジア、沢山の学びと経験、学生たちにとって大きな飛躍となった留学でした。



タイ国タマサート大学短期留学に参加して

地域社会科学2年 田中美宇

9月4日～9月19日の2週間、私たち14名はグローバル人材育成プログラム・タマサート大学短期留学でタイの地へ訪れました。このプログラムは、タイのトップクラス大学であるタマサート大学に留学し、現地の学生たちと生活や交流をしながら、歴史や言語を座学で学び、実際にフィールドに赴いて文化を学び、日系企業訪問をして経済を学ぶ、といったもので、短い期間ながら幅広い分野の内容が詰まっ

た、とても充実した2週間となりました。研修内容は堅いものだけでなく、みんなで伝統衣装を体験したり、タイ料理を作ったり、タイダンスをしたりなど、歴史や文化を楽しく体験型で学ぶことができたのも魅力的でした。また、タイ人は皆日本人に温かく、それぞれ多くの友人を作ることが出来ました。

今、世界はますます発展し、変化しています。グローバル化も進んでいます。日本人はまだ海外のことを知



現地（タイ）にて

る必要があると思います。そんな中、大学の夏休みという貴重な期間に海外で良い経験をする事が出来たことを本当に嬉しく思います。



比較文化学科教授
山本芳美

アーミッシュとポピュラー文化

アーミッシュの人々には、閉鎖的かつ時代錯誤な生活をしているとのイメージがあります。このイメージは誇張された形で、アメリカのポピュラー文化に引用されています。例えば、ハリウッド映画には「刑事ジョン・ブック 目撃者」(1985年)、「ヴィレッジ」(2004年)があります。シンガーソングライター、アルヤンコビックも、Coolioの「Gangsta's Paradise」の替え歌「Amish Paradise」(PVは必見)で、笑いも交えつつ、その生活信条を紹介しています。4年ゼミ生の戸塚寛子さんによる、比較文化学科の学生らしいレポートをお読みください。



アーミッシュカントリーに滞在して

比較文化学科4年 戸塚寛子

「アーミッシュ」を知っているだろうか。彼らは17世紀に、迫害にあいヨーロッパからアメリカに移民してきたキリスト教再洗礼派の人々だ。初めて彼らを見た時、私は友人の車に乗っていた。前から黒い何かが迫って来るのが見えた。目を細めると、それは「馬車」であった。この21世紀に馬車?と思い、馬車を操っている人物に目を向けると、驚いた。まだ年端もいかない子供だったからだ。その強烈な出会いから、私は彼らを知ろうと思った。調べたところ、人々は移民した当時の生活を今もなお、守り続けていることがわかってきた。現代社

会でどうしてそんな生活を続けているのか興味がわき、アーミッシュの研究者に連絡を取ることで幸運にも9月に小規模なツアーに参加することが出来た。

アーミッシュの暮らしは現代的な生活からかけ離れていた。初めて彼らの生活を見た時、家では無地のワンピースを着た女性たちが、冬に向けキルトを手編みしており、男性はストローハットとサスペンダーのついた黒いズボンをはき、収穫用の馬車で穀物の収穫をしていた。その風景と彼らの話す独自の言語があいまって、私はどこか違う世界に紛れ込んでしまったのではないかとさえ思った。

アーミッシュはあえて不便な生活をしている。それは宗教的な実践の一部だが、ある教会の司教は「人と人の時間が最も大切だ

から、自分たちはテクノロジーを安易に取り入れないようにしている。」と答えてくれた。確かにアーミッシュ同士の結びつきは強い。たくさんの困難を人の知恵や体力をつかって乗り越えてきたからだろう。彼らの顔はいつも充実感と自信に満ち溢れていた。

アーミッシュカントリーを離れ日常の生活を送る中で、彼らの生活をよく思い出す。テクノロジーから解放され、家族総出で何かを作り上げ、時間を共有し笑いあう人々の姿に強烈なあこがれが湧き上がってくる。

不便でも、人と人の絆を何よりも大切にするアーミッシュの暮らしを、私なりの方法で実践したい。何が必要で何が不要か、彼らの調査を今後も続けることによって答えをだしたいと思う。



現地視察を通して開発教育への思いを広げた夏



国際教育学科講師
佐々木南実

夏 休みに二人がカンボジアのスタディツアーに参加するつもりだと聞いた時、正直なところ最初は心配でした。「治安は大丈夫？信頼できるツアーなの？」。なので、美しいアンコールワットの夕日と笑顔の写真が送られてきたときにはほっとしました。

新学期になると、二人は自主的に報告会を開き、学内にその学びを共有しました。探究のサイクルをすっかり自分のものにし、主体的な学びに取り組む一年生の姿は頼もしいです！

スタディツアーに参加して



国際教育学科1年 松平麻里



国際教育学科1年 丸谷美寧

私 たちは8月18日から29日の12日間、一般財団法人日本アジア振興財団主催のベトナム・カンボジアインターンシップ型スタディツアーに参加した。ベトナム戦争に関する博物館や、NGO団体、孤児院、アンコールワット遺跡群など20か所以上の研修先を訪問し、貴重な資料を見たりお話を聞いたり日本全国から集まる参加者同士でディスカッションをしたりと、充実した体験をした。それらの経験が、自分自身について、また世界情勢について多くを考えるきっかけとなった。

松平：漠然と夏休みは海外旅行に行きたいと考えており、行くなら観光だけよりも学びがあるほうが良いと考えたためこのツアーに参

加した。ツアーを通して最も考えたのは、私は全く思考能力が足りていないということであった。自分の価値観が正しいと考える傾向があるとわかることができた。ほぼ毎晩参加者同士で決められたテーマについてディスカッションする時間があり、年齢も大学も学部も違う学生と話せたことが貴重な経験であった。彼らは私の想像を超えて研修先で様々な疑問や意見を持っており、彼らの話を聞くことがとても刺激的であった。私も彼らのように、またそれ以上に多面的に物事をとらえることができる人間になりたいと思うようになり、私の人生に大きな影響を与えた出来事になった。

丸谷：現地で暮らす方々から様々

な視点で語られる言葉には多くの学びがあった。自分にとって特に学び深かったものは、「支援の目的は活動が終わること」、「ビジネスによる国際協力」という視点である。例えば、今までの自分は途上国支援といえば小学校建設といった短絡的な考えをしていたが、それは現地のニーズや状況を無視したものであり“本当に”効果的な手段ではないと気づかされた。これによって、物事の前提を正確な情報によって捉えなおすことの大切さを知った。また、誰かの役に立つためには、人の繋がりや教養が必要であると考えようになったので、そのどちらも兼ねそろえた人材になることを今後の指針にしていきたい。



教育実習を終えて



初等教育学科3年 岩松 哲平

私は10月8日から11月1日まで、山梨県の母校の小学校で教育実習をさせていただきました。実習が始まる前は、楽しみであると同時に緊張や不安もありました。しかし、実習はあっという間に終わってしまい、私にとって充実した約1ヶ月間となりました。

私は5年生12人の子どもたちと毎日を過ごしました。私は体を動かすことが好きなので、それを生かして子どもたちとたくさん関わろうと実習前に決めていました。休み時間には5年生だけでなく、他学年の子どもたちとも鬼ごっこやドッジボール、鉄棒などをして楽しく体を動かし、様々な子どもたちと関わることができました。

実習校では、実習1週目は、子どもたちの授業観察を主に行い、少しずつ交流しながら過ごすことが出来ました。実習2週目から毎日1時間ずつ、授業をさせていただきました。授業では、45分の授業をつくる大変さ、子どもたちに伝える難しさを感じました。中でも、子どもたちがどのようなことに悩み、何が分からないかが分からず授業づくりの難しさを実感しました。毎日授業をさせていただいた中で、私の

大きな課題は「発問のしかた」でした。子どもたちが考える時間、聞く時間、ノートやプリントに書く時間としっかり時間を分けることが大切であると教えていただきました。また、子どもたちに伝えたい内容を明確化し、何を考える時間なのか、何を答えるのかを明確にして、理解しやすくすることが大事だということも学びました。うまくいかず悩んだこともありましたが、毎日授業をさせていただくことで、どのような発問が子どもたちにとって分かりやすく、考えるきっかけとなるのかということが少しずつ掴めるようになりました。そして、子どもたちが問題を解いた後に笑顔で挙手をしてくれたときや、私の伝えなかったことが、児童に伝わっていると分かったとき、授業後に「先生の授業が分かりやすかった」と直接言ってくれたときは、とても嬉しかったのを覚えています。

また、授業中に子どもたちにかける言葉選びにも苦戦しました。子どもたちは私が思っている以上に敏感で、少しの言い方のニュアンスの違いで自分の思いとは全く違う方向で考えてしまうなど、授業が思いがけない方向へ進み困ったこともありました。しかし、子どもたちと授業をしていく中で、どの言葉を使えば正確に意味を受け取ってもらえるのかわかるようになり、子どもたちが必死に悩んでくれているのがうれしくなっていくのを感じました。

17日間の教育実習で、私は多くのことを学び、経験させていただきました。元気で明るい子どもたち、お忙しい中たくさんご指導いただいた先生方、声をかけて励ましてくださった職員の方に感謝の気持ちでいっぱいです。この気持ちを忘れず、教師になることを目指して残りの大学生活を悔いのないよう過ごしていきます。



こどもからもらったプレゼント

教育実習で学んだこと

国文学科3年 島倉 也実



今年9月に、母校である岐阜県の中学校に教育実習に行かせていただきました。非常に緊張した4週間でしたが、多くの方々に支えられ、大変実りのある経験になりました。

実習で最初にしたのは、生徒たちが素直で優しく、頑張り屋であるということです。その土台には、学校全体で一人一人の生徒の良さを認めて伸ばす、先生方の取り組みがあることに気がきました。

生徒たちの頑張りや先生方の熱意を間近で感じ、「自分には何ができるのか」と無力感を覚えたこともありましたが、それを乗り越えさせてくれたのも、生徒たちであり先生方でした。自分が頑張った分だけ生徒から反応が返ってきたり、先生方が熱心なご指導をしてくださったりしたことで、それに応えるためにさらに頑張ろうと思いました。

実習中は3年生のクラスに所属し、国語と道徳の授業を行いました。国語の授業は、魯迅の「故郷」を通して「置かれた状況で人はいかに生きるべきか」を考えるというものでした。生徒への問いかけや、全員が参加できる授業にするためにはどうすればよいかということで悩みましたが、机間指導を行ったり、国語が苦手な生徒のためにワークシートを作成したりと、自分なりに工夫をしました。最初は生徒たちにも私にも固さがありました。日数が経つにつれて信頼関係ができ、積極的に発言してくれるようになりました。道徳の授業は、「ライバル」をテーマに行いました。自分の心の醜さについて考えるという難しいものですが、生徒たちが自分なりのことばで発言してくれたことが嬉しかったです。同時に私自身も、自分のことばで子どもたちに何かを伝えることの難しさを学びました。

教育実習で学んだことは、大きく2つあります。1つ目は、生徒を

軸にして物事を考えた上で、生徒の良さや頑張りやを褒めることの大切さです。「生徒の立場に立つ」という言葉をよく聞きますが、実習を終えた今、「生徒を軸にする」とことと「生徒の立場に立つ」ことは少し異なるのではないかと考えています。2つ目は、よい授業をつくるためには、生徒との信頼関係が重要だということです。先ほど述べたこととも関連しますが、よい授業をつくるためには、授業のことだけを考えるのではなく、日頃から生徒と共に活動し、生徒を褒めた上で、一人一人に合わせた指導をすることが大切だと学びました。

今回の実習では、人との出会いの大切さを強く感じました。岐阜県出身の先生方が多い中、都留文科大学出身の先生がいらっしや、色々な話をさせていただきました。そして何よりも、常に生徒一人一人のことを考え、教員になってからも学び続ける先生方に出会い、ご指導いただけたことが本当にありがたかったです。

教育実習を通して、将来、子どもに真摯に向き合える教員になり、自分を成長させてくださった方々に恩返しをしたいという思いが強くなりました。そのために、これからも努力を続けていきたいと思えます。



教育実習を終えて

英文学科4年 大森ともな



私は9月中旬から10月にかけて地元北海道の母校で教育実習をさせていただいた。6月に行われる前期、実際に私が行った後期どちらに参加するか選択することができたので、教員採用試験のひと段落する後期に参加することを決めましたが、事前の講習や、周囲の友人、先輩の話を聞くと、教育実習を通じて自分は教師に向いてないと感じて教職をあきらめる人も少なくないようで、自分自身も実習が終わってもこれまでと変わらず教職を目指していけるか不安もあった。

実際に教育実習に赴いて、確かに教材研究、教案作成に追われる毎日は大学生活とは比べ物にならないほど忙しく、授業においても生徒指導においても自分の力不足を実感し、心が折れそうになる瞬間もあったけれど、吸収することが多く、また何より授業以外でも慕ってくれる生徒と過ごす時間がとても楽しく幸せだった。



教育実習を通じて、教育実習を意義あるものにする上で、また教員になる上で大切なことは、教科への興味と、子どもが好きであるなど、教員という職業自体への興味のバランスではないかと感じた。私が英語の教員になりたいとおもったきっかけは、中学生の時に、英語は好きだが英語の授業は好きではないと気付いたことであった。小学校から英語を習っていた自分にとって英語は表現するためのツールの一つであるという認識が強く、好き、嫌いという意識をあまりもたなかったが、中学で教科として学ぶ英語はアウトプットの機会がほとんどなく正解、不正解がはっきり決まっており、表現することにはあまり重点が置かれていなかったため、周りの中学から英語学習を始めた友人が英語そのものを嫌いになってしまう様子を見て、もったいないと思ったことが自分の教員になりたいモチベーションになっていた。そのため、教育実習の中でどんなに準備が大変でも授業で生徒が何か新しい気づきを得たり、英語で会話しようとしている姿をみるのが嬉しく、実習を乗り切る活力になっていた。また、生徒指導の面でも問題に直面することがあったため、英語が好きである、もしくは子どもと関わるのが好きである、いずれかの気持ちに偏ってしまっていたらうまくモチベーションを維持できなかったのではないかと感じた。

3週間の実習では、実習生は実際の教員とは立ち位置が違う分、この実習期間中にしか気づけないこともきっとあると考え、限られた時間の中で生徒と積極的に関わりを持つことを目標に据えて過ごした。実際に昼食を一緒に食べたり、放課後に残っている生徒と話すことで、生徒同士の人間関係、勉強や進路に対する素直な考えを聴くことができたと思う。教師の仕事はブラックであるといわれるように、実際に教壇に立った暁には、楽しいと感じることばかりではないと思うが、この実習で感じたこと、学んだことを忘れず邁進していきたい。

実習録

社会学科（環境・コミュニティ創造専攻）4年 宗形香名



社会学科環境・コミュニティ創造専攻4年宗形香名です。私は主免許で中学校社会、副免許で小学校を取得しているため、5月に中学校、10月に小学校に実習へ行きました。

最初に実習に行ったのは、中学校です。打ち合わせの段階で担当する単元や教科書を教えていただいたので、大学でできる限りの教材研究をしていきました。担当科目は1年生の社会科で、地理と歴史を5クラス担当しました。クラスとしては、そのうちの一番元気のクラスに入ることになりました。2日目から授業実習が始まりましたが、最初は生徒の反応がいまいちで、生徒が興味を持って聞いていないことが目に見えてわかりました。そこから、毎日自分の授業を反省し、指導教員の先生にご指導いただきながら、どうやったら生徒を巻き込んだ興味の引く授業ができるかを研究していきました。空き時間は他の先生の授業を見学に行き、いいなと思ったものは取り入れるようにしました。そうして研究していくうちに、「先生の社会の授業は楽しい」という言葉を聞くことができ、生徒の発言が活発になりました。

生徒との距離をある程度縮めるため、昼休みや掃除の時間など積極的に話しかけるようにし、出来るだけクラスの子が入っている部活に参加するようにしました。そうすることで、授業もやりやすくなりました。何より大切なのは、笑顔で子どもたちに接することだと感じました。

次に実習へ行ったのは、小学校で、6年生を担当しました。授業した教科は社会・算数・理科・道徳です。2週間という短い時間だったため、普段の授業準備に加え研究授業の準備も並行して行うのがとても大変でした。クラスは最高学年らしく落ち着いていましたが、授業中の発言は少なく、反応が乏しいクラスでした。その反面、とても優しく、困っている人に手を差し伸べられ、自分達で考え協力できるクラスでした。なので、出来るだけ朝の時間を利用しておしゃべりしたり、昼休みに一緒にカードゲームした

りました。

そして、研究授業が終わった次の日、児童に「先生、次の授業は職員室で待ってて」と言われ、待っていると児童が呼びに来ました。そして教室に入ると、サプライズで私のお別れ会が始まりました。子どもたちが考えたたくさんの出し物、最後には色紙を二枚もプレゼントしてくれました。私は何より児童が自分たちで考え企画し、行動してくれたことにととても感動しました。一生の宝物です。

私が実習中に守ろうとしていたのは、「挑戦する・諦めない・妥協しない」ということです。授業や子どもとの関わりでも、失敗の原因を考え、また挑戦し自分の納得できるまでやるということです。一生懸命にやればやるほど、指導教員の先生や周りの先生、そして子どもたちに思いが伝わります。教育実習を通じて非常に良い経験が出来たこと、とても感謝しています。そして来年から始まる教員としての生活に生かしていきたいです。ここに書いた体験談が少しでも後輩のみなさんの助けになれば幸いです。



生徒達から



学外研究を助走として

学校教育学科 教授 田中昌弥

学務の事情で変則的な時期となりましたが、2018年10月初めから19年9月末までの1年間、学外研究に行かせていただきました。これを機会に、交流を続けてきたアルバータ大学を研究の場とすることも考えましたが、前任校でも本学でも大学改革の大波に対処する役回りに忙殺され、やり残した研究課題が山積していることも気になっていました。そこで、新しいことに手を付けるのは禁欲し、受け入れ機関となってくれた東京大学で読み、考え、自分の書きたいことを書くというシンプルな研究生活を送ることにしました。

研究テーマは、「Narrative Inquiryの観点による戦後教育学の再検討」とし、研究期間を二つの時期に分けて作業を行いました。

前半は、東京大学出版会から二巻の共編で出版される『戦後教育学の再検討(上) 一歴史・発達・人権』、『同(下) 一教養・平和・未来』(共に印刷中)の編集および執筆作業です。本書は、日本の教育をけん引してきた「戦後教育学」の今日的意義と課題はどこにあるのかについて、計27名の執筆者に各自の専門領域からの考察を依頼したものです。

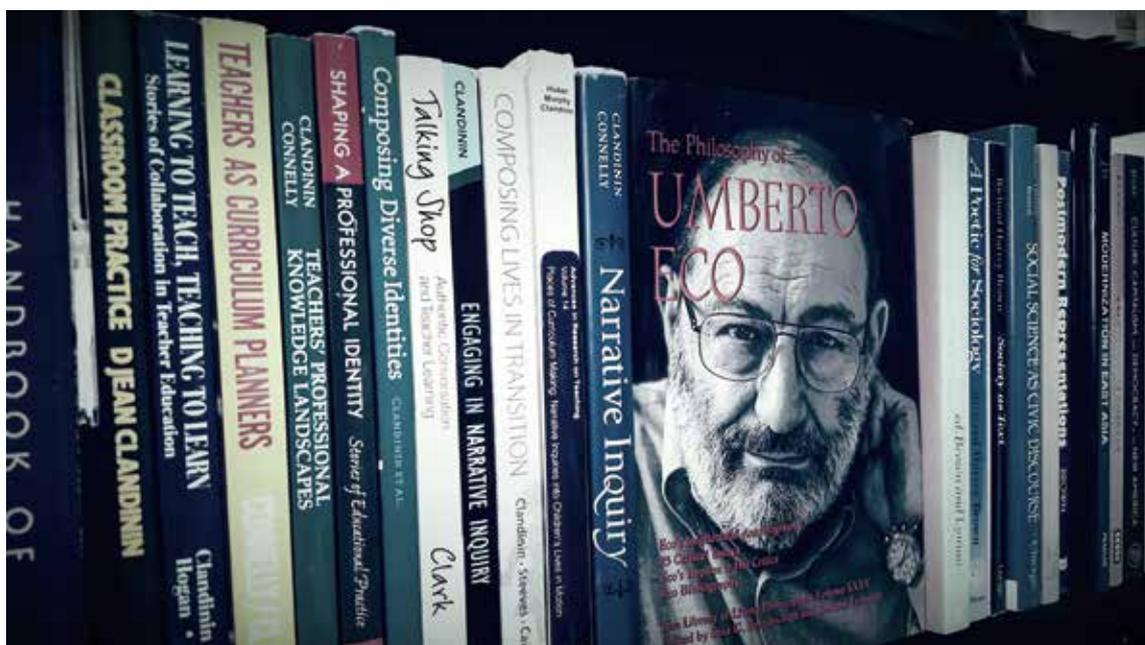
書名からもわかるように、本書は、わたしの学外研究の課題とも密接に関係しており、全体の編集と、「はじめに」における方針の提示、基本的な論点を検討する「座談会」のコーディネートを担当しました。そして、自分の担当論文である「ナラティブ・アプローチによる教育学の再構成」では、戦後教育学が今日的可能性を切り拓くためには、ナラティブ

の視点による捉え直しが必要であることを指摘しました。全体で700頁を越えるこの上下巻は、わたしの今後の研究の足場にもなるものです。

後半の作業は、戦後教育学を批判してきたポストモダン論の行き詰まりを受け、その批判の意義ある部分は捉えた上で、しかし、教育的価値の提示をどのように行えるのかについて考察する理論研究です。この課題に、R.H. ブラウンのテキスト論的社会学、U. エーコの記号論的ナラティブ論、そしてD.J. クランディニンのナラティブ的探究を手掛かりとしてわたしが着手したのは、実は20年以上前のことです。この問題意識に好意的な関心を示してくださったブラウン、エーコの両先生は、わたしが大学改革をめぐる雑事に追われている間にこの世を去ってしまわれました。

しかし、この研究課題は未だ古びておらず、子ども・学習者に対して何を教育的価値として提示するかについての基準がむしろ恣意的になっている今日こそ、基礎理論として重要になっていることが今回の学外研究で確認できました。加えて隣接諸学の展開の中に新しい手掛かりが生まれ始めていることにも気づくことができました。

とはいえ、作業は道半ばであり、現在も考察しつつまとめている段階です。学外研究を探究の助走期間と考え、成果を形にしていくことが、学問の先達、および、研究の経済的基盤を与えてくれている納税者への責務だと心得、今後も研究を進めていくつもりです。





2019年度英文学会前期講演会

翻訳という作業

—イシグロとウルフを題材として—

開催：2019年6月26日（水） 講演者：土屋政雄氏

講演会では、例を挙げながら土屋氏自身の持つ翻訳についての考え方を語っていただいた。その中でも、土屋氏が講演会中何度も繰り返しおっしゃっていたのは、文脈の大切さである。例に挙げられていた‘You are still a good girl.’のように、どんなに簡単な文章であっても、いつ、だれがだれに対して、などの情報がなければその文の伝えたいことを表すことはできない。翻訳は文脈がわからないとできないものであり、文脈から必要な情報を読み取り、翻訳に反映させなければいけないという作業は、当たり前に見えて奥が深いと感じた。

また、土屋氏は、自身の翻訳をパラグラフ中心の翻訳と表現された。『ダロウェイ夫人』の翻訳を題材に自身の翻訳の意図や工夫をほかの翻訳者の方の翻訳と比べながら説明していただいた際、そのことがよく分かった。パラグラフ全体が同等の意味になるように訳すことで、個々のセンテンスの持つ性質を表すことができるとおっしゃっていた。実際の翻訳を使い、なぜそう訳したか、というこ

とをご本人に語っていただけたことは、貴重な体験であった。

翻訳という作業についてだけでなく、Google 翻訳や世界で見られる機械化の流れを見ながら翻訳作業を行う AI についてもお話していただいた。土屋氏は「奇跡のワトソンプロジェクト」をきっかけに、翻訳の作業を人がずっとやっていけるのか考え始めたという。翻訳には文脈を読み取る力が必要であるというご自身の考え方もあり、AI にそれができるとは思わないとおっしゃっていた。Google 翻訳についても、膨大な情報量により文章のニュアンスを理解しているような翻訳をしているが、いい翻訳にはいいデータが必要であ

り、ネット上にはまだまだ悪文も多いため、翻訳の仕事が AI に代わられるのはまだ先ではないかとのこと。一方で、冒頭のプロフィール紹介の際、「翻訳がうまくなるためには数をこなすことが必要だ」とおっしゃっており、AI も人間も翻訳の基本に共通点があるとは興味深い。

講演会の最後時間が足りなくなってしまい、『ダロウェイ夫人』の翻訳解説を詳しくお聞きできなかったのが残念ではあったが、とても充実した 90 分間であった。お話を聞いて、もう一度翻訳という観点で作品を読んでみるのもおもしろそうだと感じた。

(2年 宮澤朱希)

講師紹介



土屋政雄（つちや まさお）

1944年長野県松本市生まれ。東京大学在学中にアメリカに2年間留学し、東京大学中退後、IBMの技術翻訳を30年近く行う。1981年『FBI 独裁者フーバー長官』（中央公論社）で初めて書籍の翻訳をし、これをきっかけに、文芸翻訳を手掛けるようになっていく。訳書には、カズオ・イシグロ『忘れられた巨人』、『わたしを離さないで』、『日の名残り』ヴァージニア・ウルフ『ダロウェイ夫人』など多数ある。



2019年度地域社会学会講演会

普通って何？—ASD・ADHDを中心に—

開催：2019年7月3日（水） 講演者：姫野 桂氏

地域社会学会では2019年7月3日（水）に、姫野桂さんをお迎えし、「発達障害」、またその診断のグレーゾーンにいる人々の「生きづらさ」をテーマに講演会を行った。この講演会は、発達障害の当事者かつ取材経験が豊富な姫野さんから、「普通って何？」という切り口でお話を伺うことで、発達障害に関わる生きづらさを身近な問題と捉えてほしいと考え、企画した。

発達障害にはADHD（注意欠如・多動性障害）、ASD（自閉症スペクトラム障害）、LD（学習障害）があるが、その傾向の強さはグラデーション状になっており、明確な線引

きは存在しないという。そのため傾向は見られても、医療機関の診断には至らなかったり、あえて診断を受けなかったりする人が存在するそうだ。姫野さんは、このような発達障害の診断の狭間にいる人を発達障害の「グレーゾーン」と指摘する。姫野さん自身も子どもの頃から発達障害の傾向が見られていたが、最近ADHDとLDの診断を受けたという、発達障害とそのグレーゾーンの当事者だ。またフリーライターとして発達障害当事者の取材を多く行っており、事情をよく知る人物でもある。

講演会では、姫野さん自身の経験

や当事者への取材を基にした発達障害の傾向と生きづらさを、具体的なエピソードを交えて聞くことができた。たとえば、姫野さんは算数のLDの傾向があり、簡単な計算も難しいという。そのためお釣りの計算が伴う店の会計や経理の仕事につまづいてきたそうだ。このような経験から現在は、確定申告を税理士に頼むなど、対策しているという。

また、グレーゾーンという曖昧な存在を考えることから、「普通って何？」という、誰もが感じたことのある疑問と向き合う機会にもなった。講演会内や姫野さんとの会話、アンケートでは、この問いかけに対し、参加者の意見も聞くことができた。単純な知識の提供だけではなく、参加者自身の生きづらさを分析する視点も提供でき、考えを深める講演会だと感じた。

姫野さんは今後、発達障害だけにとどまらず、ジェンダー問題や経済格差問題など「大きな意味での生きづらさ」を取材していきたいという。「普通って何？」という疑問と向き合う中で、この活動も大きな意味を持ちそうだ。

（社会学科現代社会専攻4年 菅野千歳）

講師紹介



姫野 桂（ひめの けい）

フリーライター。1987年生まれ。宮崎市出身。日本女子大学文学部日本文学科卒。大学時代は出版社でアルバイトをし、編集業務を学ぶ。卒業後は一般企業に就職。25歳のときにライターに転身。現在は週刊誌やウェブなどで執筆中。専門は性、社会問題、生きづらさ。猫が好き過ぎて愛玩動物飼養管理士2級を取得。著書に『私たちは生きづらさを抱えている 発達障害じゃない人に伝えたい当事者の本音』（イースト・プレス）、『発達障害グレーゾーン』（扶桑社新書）趣味はサウナと読書、飲酒。



2019年度比較文化学会主催講演会

「『温泉タトゥー』問題」と多文化共生

—多文化共生社会を目指す温泉の取り組みとは—

開催：2019年7月12日（金） 講演者：川崎美穂氏・河村達也氏・諸星敏博氏

2019年7月12日（金）に5号館1階の5101教室にて、午後6時過ぎより約2時間、ミニシンポジウム『温泉タトゥー問題』と多文化共生』を開催した。このシンポジウムは、都留文科大学比較文化学会の主催によるものである。山梨日日新聞や朝日新聞の山梨欄などが事前に報じたこともあり、100名収容可能な教室には追加席も設けられるほどの盛況となった。

各地で活躍する話題提供者3名を迎えたシンポジウムでは、最初にコーディネーターとして、私が温泉タトゥー問題について20分ほど説明をさせていただいた。実際に温泉入り口にある「イレズミ・タトゥーのある方お断り」の看板写真をいくつか提示した。看板が示すように「温泉タトゥー問題」は、「ブラック校則」を支える論理や状況と通底することを指摘した。総じて「内輪」向けであり、安全に利用する目的以外の規則が多く、守れ

ない人を排除する傾向があるからだ。

最初に河村達也氏が、別府市の観光案内所の取り組みについて語った。タトゥーがある外国人旅行者から温泉利用を相談された時には、「(湯舟に入った時に周りの人に)スマイル」と促しているそうである。それでも、不安に思う旅行者には「さらに大きくスマイル」と助言する。単純だが効果がある解決策の提言に会場の空気がなごんだ。

次に川崎美穂氏が、現在運営しているタトゥーがある人を受け入れている温泉、温浴施設、プール、ジムなども含めて紹介するサイト『Tattoo Friendly』について紹介した。外国から温泉に行ったのに断られる例が周りで頻発したのがサイト設立のきっかけとのことで、不幸な出会いを減らしたいとお話であった。「タトゥーのある人は、無理やり入りたいのではないんです」と強調した。

「90年代にはスーパー銭湯がたくさん

できたときに中ですごんだ人たちがいたんですが、今は100%、反社会勢力や暴力団員が脅すなんてありえない」と切り出したのが諸星敏博氏である。ただし、タトゥーがある人を施設が受け入れると、2カ月間は施設が常連の苦情にさらされる。これが怖くて受け入れられないのが実態という。

話題提供者からの話が終わったあと、会場からの質疑応答となった。学生からは「施設が断る理由は？」など活発な質問が寄せられた。河口湖周辺の温浴施設関係者からは、「90年代オープン直後に大挙してきた人々から脅され、毅然とした態度で追い返した」との経験が語られるなど、一筋縄では行かない状況も共有できた。

多文化共生社会の実現には、湯あみ着を着用しての男女混浴など、新たな入浴スタイルも選択肢として視野に入れる必要があることも理解できたシンポジウムであった。(比較文化学科教授 山本芳美)

講師紹介



川崎美穂氏 河村達也氏 諸星敏博氏

川崎美穂 (かわさき みほ)

1999年に専門情報誌『TATTOO BURST』を創刊。現在はタトゥーのある人でも利用可能な温泉施設等を紹介するバイリンガルサイト『Tattoo Friendly』を運営する。

河村達也 (かわむら たつや)

一般社団法人 別府市産業連携・協働プラットフォーム B-bizLINK (ビービズリンク) コーディネーター。2018年に別府市内のタトゥー受け入れ温泉マップを制作・公開した。

諸星敏博 (もろほし としひろ)

2006年から利用者データ・業界情報を基に温浴施設向けのコンサルティングを開始する。2015年に一般社団法人「温浴振興協会」を設立し、代表理事となる。

サークル紹介 合唱団

初等教育学科3年 合唱団 団長 萱沼 美結

私たち都留文科大学合唱団は約60年の歴史を持ち、現在はコンクールや訪問演奏など様々な場所で文大サウンドをお届けしております。11月23日(土)には、ロームシアター京都で行われた第72回全日本合唱コンクール全国大会 大学ユースの部に出場し、『金賞』ならびに『文部科学大臣賞』、そして次大会への出場権にあたる『シード賞』を受賞することができました。

新体制となってから約1年、ここまでの道のりは決して平坦なものではありませんでした。楽しいことばかりではなく、大好きな合唱から離れたくなるほど苦しい時が何度もありました。しかしその度に背中を押して下さったのが応援してくださる皆様の声援でした。心が折れそうな時、温かい言葉の数々に私たちは何度も勇気をもらいました。そんな皆様への感謝の気持ちを胸に挑んだ今大会、このような形で恩返しをすることができましたことを団員一同大変嬉しく思っております。

応援してくださる皆様と掴みとった1位。これからも都留文科大学合唱団は皆様と共に、さらに進化してまいります。



サークル紹介 女子バレーボール部

初等教育学科4年 女子バレーボール部 主将 船田 純香



私たち、女子バレーボール部は現在部員29名で関東リーグ1部昇格を目指し、活動しています。今年の春季リーグで2部昇格を果たし、昇格したのちの秋季リーグでは、都留文科大学女子バレーボール部創立以来初の2部優勝という成績を残しました。昨年の秋季リーグで降格を経験したからこそ、たくさんの課題が見つかり、約1年間監督、部長、4年生を中心に日々練習に励んできました。また、下級生の大きな力も加わり、強みである全員バレーで勝利を掴みました。部員だけでなく、いつも応援してくださる関係者の皆様のおかげで勝ち進むことができました。1部との入れ替え戦では、3-1で敗戦となりましたが私たちにとって次に繋がる大きな経験となりました。この貴重な経験を無駄にせず、今まで続けてきた伝統を大切にし、これからも練習に精進してまいります。

第46回 鶴鷹祭



令和初の鶴鷹祭となった、『第46回鶴鷹祭～都留文科大学・高崎経済大学総合体育対抗戦～』は、6月22日（土）、23日（日）の2日間、高崎経済大学を会場に開催されました。



本学は通算成績では、24勝18敗2引き分けと勝ち越していますが、昨年まで、3連敗と勝利から遠ざかっていました。今年は、屈辱を果たすべく「百折不撓」を、高崎経済大学は「前人未踏の4連覇～至誠を尽くせ」をスローガンに掲げ、両校の学生がお互いの力をぶつけ合いました。

2日間にわたり両校の選手たちが接戦を繰り広げた結果、8（都留）－12（高崎）で高崎経済大学が4連覇を飾りました。

来年度は舞台を本学に移しますが、地の利を生かし、本学の体育会部活動に所属する学生たちが、勝利を掴み取ることを期待します。



第64回桂川祭 開催報告



桂川祭実行委員会委員長
森田日菜子



『和』というテーマのもと、10月31日（木）から11月2日（土）までの3日間にわたり、第64回桂川祭を開催いたしました。『和』という言葉には、「あたたかさ」「調子を合わせる」「混ぜ合わせる」という意味があり、桂川祭を明るく暖かいものにしたい、という思いが込められています。

毎年恒例となっている開会式のパルーンリリースには、平日であったにも拘わらず多くの方々に参加していただき、皆様と一緒に桂川祭の幕を開けることができました。様々な団体の模擬店出店やステージでのパフォーマンス、実行委員主催企画等で当日の会場はとても賑わいました。

3日間を通して、メッセージボード企画とモザイクアート企画が行われ、2日目にはボルダリング体験企画、プロジェクションマッピングを行いました。3日目には芸能人企画と移動動物園企画を実施し、学内外から数多くのお客様にお越しいただき、年齢問わず楽しんでいただけました。

3日目の夜には煌びやかな花火が打ち上げられ、第64回桂川祭のフィナーレにふさわしいものになったと感じております。

全体を通して大きな問題もなく、安全で楽しい桂川祭を開催できたのも、多方面で携わっていただいた数多くの方々のお力添えによるものだと思っております。この場を借りて御礼申し上げます。第64回桂川祭が皆様にとって思い出に残る3日間となりましたら幸いです。本当にありがとうございました。



2019年度夏季オープンキャンパス報告



8月3日(土)4日(日)の2日間にわたり、夏季オープンキャンパスを開催しました。昨年度までは7月中旬に開催していましたが、今年度は、高校生が夏休み期間である8月に日程変更しました。北海道から沖縄まで、全国から両日で3,103人という、過去最高の来場者数となりました。

オープンキャンパスでは、大学概要説明会、キャンパスツアー、キャンパスライフ説明会、留学相談会、高校教員を対象にした懇談会等のほか、学科ごとに学科説明会、特別講義、個別相談会を行いました。過去にない大勢の来場を受け、急遽教室を増やして説明会を実施した学科もありました。個別相談会では、学生スタッフも教員と一緒にあって高校生の対応に。それぞれの学科では、待合室でビデオを流したり、教室の壁にポスタープレゼンテーションをしたりといった工夫があちらこちらに見られました。また、今年は新たに英語劇やキャンパスショーとしてのサイエンスショー、同伴のご家族向けに図書館で映画付きのリラックスコーナー等も試みました。学生による部活動やサークル発表が校舎内や広場で行われ、高校生たちが楽しむ様子が見られました。

炎天下の中、準備・運営にご尽力をいただいた教職員、学生スタッフ、広報委員会の皆様、ありがとうございました。来場者アンケート結果等を次回のオープンキャンパス、広報活動に生かしていきたいと思っております。

※秋季オープンキャンパスは、台風19号の上陸に伴い、中止となりました。

前期修了者卒業式



9月25日(水)、本部棟3階大会議室において、令和元年度前期修了・卒業証書の授与式が執り行われました。

今年は12名の学部卒業者のうち、8名が出席しました。当日は、担当教員をはじめ多くの教職員が見守るなか、福田誠治学長より1人ひとりに卒業証書が授与されました。

その後、学長から卒業生に「送ることば」として激励や祝辞が贈られ、卒業生たちの前途を祝しました。

夏季集中講座

「現職教員教育講座」を開催

7月24日(水)の10:00～15:00、1号館403教室において、地域交流研究センターによる夏季集中講座「現職教員教育講座」を午前の部と午後の部の2講座開催しました。

内容は、午前の部が宮下 聡先生(教職支援センター特任教授)による『道徳性の涵養Ⅰ』、午後の部が堤 英俊先生(学校教育学科 准教授)による『教育現場

におけるユニバーサル・デザインの利用Ⅰ』です。

また、本講座は山梨県総合教育センターの「中堅教諭等資質向上研修」(旧:十年経験者研修)の選択講座に指定されており、県内各地の小中学校及び高等学校より、午前の部51名、午後の部50名と、多くの先生方にご参加いただきました。



教員免許状更新講習

本学では、例年、教員免許状更新講習を開設しております。11年目を迎えた今回は、6月29日から7月28日までの土曜日又は日曜日、計6日間にわたり13講習を開設し、延べ受講者数は480名にのぼりました。

開設した講習は以下のとおりです。

【必修領域】：

『教育の最新事情』佐藤 隆 教授・堤 英俊 准教授、

【選択必修領域】：

『新学習指導要領に対応した外国語科及び外国語活動の授業づくり』上原 明子 教授、

『学校におけるICT活用授業と情報モラル教育』相澤 崇 准教授、日向 良和 准教授、小河 智佳子 特任准教授、

『法令改正及び国の審議会の状況等』廣田 健 教授

【選択領域】：

○小学校教諭向け：

『地層と化石の観察』(理科教育) 鷹野 貴雄 非常勤講師、

『「主体的、対話的で深い学び」と「国語教室」』

春日 由香 准教授、

『算数授業を通して育てる力をつける指導』(算数教育) 滝井 章 特任教授、

『感性を働かせてリズムに乗ろう！動いてみよう！』

(音楽体育)【音楽】十川 菜穂准教授【体育】水口 潔 教授、

○中学校、高等学校教諭向け：

『情報機器の活用による国語科の授業改革』(国語分野) 野中 潤 教授、

『中学校・高校における英語の授業づくりの工夫』(英語分野) 萩原 一郎 特任教授、

『社会科の新しい動向と教材作り』(社会分野) 西尾 理 教授

○小学校、中学校、高等学校教諭向け：

『子どもたちの心とかかわるために』(教育相談) 正木 啓子 非常勤講師、

『学級集団育成の理論とグループアプローチ』(学級経営) 品田 笑子 非常勤講師



子ども公開講座「陶芸教室」を開催

令和元年7月28日(日)、都留文科大学内において、学校教育学科図工・美術教室の教員と本学学生による子ども公開講座「陶芸教室」を開催しました。子ども公開講座は、都留市教育委員会の主催する「放課後子ども教室」事業と都留文科大学地域交流研究センターの連携事業であり、参加するためには教育委員会への参加申し込みが必要となります。

当日は18名の子どもたちが参加しました。

低学年と高学年に分かれて学生の説明を聞いてから、作品作りを行いました。低学年の子どもたちには大学の机は高すぎるので、美術教室特製の低い机で作品を作りました。

低学年の子どもたちはお皿を、高学年の子どもたちはろくろを使ってマグカップや器を作りました。

完成した作品は、大学で乾燥させてから窯で焼き、後日子どもたちに渡されました。

《参加者の感想》

- ・ つくるのがたのしかったです。またきたいです。
(1年生・女)
- ・ はじめてお皿を作れてよかったです。(3年生・男)
- ・ むずかしかったけど、楽しかったです。(4年生・女)
- ・ ねんどであんなおさがつくれるなんて知りませんでした。学校でも作ってみたいです。(2年生・女)
- ・ 前にもとうげいをじゅくでしたことがありました。

- ・ でも、3年前のことなのにうまくできるか心配でしたが、説明がよく分かり、自分だけの作品が作れました。また、この会が、あるならば、ぜったに、いきたいです。本日はありがとうございました。とてもたのしかったです。(4年生・女)
- ・ かざりをつけたりするのが楽しかった。好きな形に切るのが大切だった。ありがとうございました。
(5年生・女)

編集後記

齊藤みどり

木々が色づき、風が冷たくなった。都留での3回目の秋だ。そういえば面接のためにはじめてここに来たのもこの時期だった。あれから3年。小さな山村育ちの自分にとっては、どこか懐かしさを感じるこの静かなまちで仕事ができるのは、夢のようなことであった。しかし、同じ年に「入学」した3年生は私よりもしっかりと都留に根を張り、大学生活を謳歌している。彼らを眺めながら、まだまだここに馴染んでいない自分をもどかしく思う。

小学校の頃、『ことばの海へ雲にのって』という本で諸橋轍次という人物を初めて知り、彼のことばへの情熱と生き方に憧れたものだが、彼がかつていた場所に自分がいるのは、本当に不思議な巡り合わせだ。だが、周りの景色はさほど変わってなくても、大学教育をめぐる環境は激変したに違いない。実用的な教育に関心が向けられ、大学教育における人文学へ風当たりが強くなりつつあるいま、文学をとりまく状況も厳しくなったのではと感じる。

文学の大切さとは何か、小説を読むことの大切さとは何か、それをどのように伝えればよいのか。私が葛藤を感じたのも今に始まったことではない。地下足袋をつけて朝早く山に入る父の姿や、畑で黙々と働く母の姿を目にするたびに、本を読むのは道楽なのではないかと悩んだものだった。しかし、小さな集落到に住む人間にとっては、本はより大きな



世界への扉そのものだったのだ。

本を読むことは、物事を知るだけでなく、見知らぬ人への想像力、その人が受けたであろう苦しみについても思いを巡らせることを可能にする。そして、ことばによって人間は世界に豊かに複雑に結びつけられているのを教えてくれる。

「読者が小説を読むのは、凍えるような自分の生（命）を温めるためだ」とウォルター・ベンヤミンは記した。人の魂がことばによって温められるのであれば、本を通して、学生たちにもそのようなことばに出会ってもらえればと願っている。

おめでとう合唱団 全日本合唱コンクール全国大会 「11年連続金賞受賞」「文部科学大臣賞」受賞



訃報

令和元年10月1日(金)元学長で名誉教授の上田 薫先生が逝去されました。ここに、先生の生前のご功績を偲び謹んで哀悼の意を表します。

公立大学法人
都留文科大学
〒402-8555 山梨県都留市田原 3-8-1
☎ 0554-43-4341
URL : <http://www.tsuru.ac.jp/>

都留文科大学報 第141号 2019年12月20日発行

都留文科大学広報委員会

鈴木健大(委員長)・日向良和(副委員長)・新保祐司(担当副学長)・長瀬由美・加藤めぐみ・齊藤みどり・佐々木南実・水口 潔・山口博史・藤江 毅・小林泰憲(経営企画課長補佐)・清水友美子(企画広報担当)・関戸聡子(企画広報担当)